

## 甲州道中布田五ヶ宿について

吉川博康

### はしがき

近世の村のもっている変貌の傾向や方向が地域的にどのように相違しているかを究明しつつある筆者は、今回、宿駅でありまた江戸という大都市の近郊にもあつて複雑な要素をもつ甲州道中布田<sup>ふだ</sup>五ヶ宿を選び究明することにした。

まずここでとりあげた資料について次の二点に触れておきたい。

- (一) 残存入手資料がほとんど近世後期のものであるため、この時期を主としたということ。
- (二) 布田五ヶ宿とは国領、下布田、上布田、下石原、上石原の各宿をさすが、全宿の資料が入手できなかったため、宿の中心部に位置する上布田と下石原の二宿の資料を中心に検討し五ヶ宿を推定したこと。

### 一、布田五ヶ宿の概況

布田五ヶ宿はいうまでもなく甲州道中の一宿で江戸日本橋より六里の距離にあり、江戸近郊と考えてさしつかえあ

第2表

定 人 馬	宿 分	助 郷 分
8 人 6 疋	13 人 9 疋	4 人 10 疋

出典：文政4年(1821)宿方銘細帳  
嘉永2年(1849)下石原村明細帳

助郷村は明和九年(一七七二)の文書によると二六カ村あり、その村高九〇一〇石であった。助郷村は多摩川沿岸の村か多摩丘陵内の村で主に宿の西南方に分布していた(第1図)。宿と助郷との関係では人馬触当のことで一回紛争がおきているが、助郷負担もそれほど大きくない大名交通も少ない本宿では他の宿でみられたような深刻な紛争はみられなかった。

甲州道中を通過する大名は、信州高嶋藩、同高遠藩、同飯田藩の三侯八万三千石であったが、中山道を利用することもあり、東海道や他の街道に比較してはるかに通過が少ないのであった。しかし近世中期以後の江戸の消費経済の発達は甲州や郡内から江戸向けの商品も増加し、甲州道中もそうした交通量がふえていった。天明八年(一七八八)の資料<sup>⑥</sup>によると、甲州のぶどう、

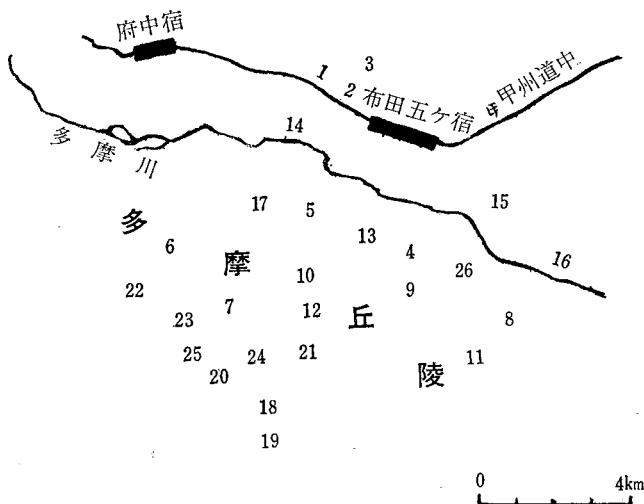
第1表 布田五ヶ宿旅籠屋数

宿	村	数
国 下 上 下 上	領	1
	田	3
	布	1
	石	0
	石	4
	計	9

るまい。五ヶ宿の長さは約三キロメートル強であり、街道にそった単線路村型の形態を示す。宿としては五街道一般の宿と異なつて本陣も脇本陣もない、また地子免許もないところであった。旅籠屋は天保一四年の宿村大概帳によれば第1表の通りである。総戸数三八八戸であるから旅籠屋率二・三%であり旅籠率の小さいことを示している。しかもこの表のうち国領と上布田のものは小規模で大旅籠は存在しなかった。人馬の継立は五ヶ宿にそれぞれ問屋場がおかれ、一カ月を六日交代で分担し勤めていた。宿の継立人馬は二十五人二十五疋で、その内訳は第2表の通りである。

宿ではこれらの人馬を家の間口割にして担せしめ、六間間口にて人足一人、間口十二間のもの馬一匹を相勤めた。

なしかきなどの水菓子類、津久井の鮎、また紙、煙草の類が下り荷物として輸送されたことが明らかで、宿に口銭を支払って通過する賃附馬（中馬）がその輸送にあたった。これら商品荷物がどのくらい一カ年に運搬されたかという  
と次の下石原宿の口銭の積立資料があるのでみてみたい。これは布田五ヶ宿の中で下石原宿が代表して、上り下りの



第1図 布田五ヶ宿助郷村分布

No.	村名	石高	No.	村名	石高
1	上飛田給	328石	14	押立	320石
2	下飛田給	184	15	和泉	223
3	大沢	323	16	駒井	77
4	中野嶋	243	17	長沼	451
5	矢野口	843	18	上麻生	500
6	坂浜	246	19	下麻生	293
7	平尾	191	20	片平	292
8	宿河原	244	21	万福寺	70
9	五反田	585	22	黒川	260
10	細山	200	23	栗木	81
11	上菅生	795	24	古沢	65
12	高石	100	25	五力田	39
13	菅	1067	26	登戸	885

第3表 口銭の積立

年	代	積立金額
文化10	(1813)	銭 5貫657文
〃 11	(1814)	5 617
〃 12	(1815)	5 362
〃 13	(1816)	6 446
〃 14	(1817)	5 615
〃 15	(1818)	6 506
文政2	(1819)	6 994
〃 3	(1820)	6 95

(下石原宿：宿方銘細帳による)

## 二、戸口と職業構成

次に布田五ヶ宿の中で上布田と下石原を中心とした戸数と人口の推移をみることにしたい。第4表によると幕末期になるにつれて両宿とも戸数がふえていることがわかる。そのほか気づくことは天保年間がその前より減っていることであろう。第5表の人口推移を窺うと戸数と同じような傾向を示している。幕末期に戸数と人口が増加したという事実はその支持力がまってきたと思われるがその理由は後述する。

性別人口をみると上布田村宝暦三年（一七五三）ころは男の方が多かったことを示している。しかしやがて女子人口の方が多くなってくる。下石原も末期になるに従い女子人口がふえている。これは他地域からの流入か、そこになんらかの理由があったものと考えられるが、後に触れることにしたい。

次の職業構成をみることにする。もちろん農業を営むものが大半を占めていたであろうが、第6表によって農業以

荷物一駄につき二文とりたてたものをすべて積みたてたものである。上り下りの区別がないが下り荷物の方が多かったと思われる。一カ年およそ六貫文から七貫文あるから三〇〇駄から三五〇駄の荷物が通過したことがわかる。しかし抜荷もあることだろうから実際の商品の輸送はこれを上廻ったものと考えられる。こうした近世中期以後の商品輸送量と往来人の増加は布田五ヶ宿の宿としての機能に影響を与えと後述するように、宿場関係の職業の増加を示すようになった。

第4表 戸数の推移

年代	村	国領	下布田	上布田	下石原	上石原
		戸	戸	戸	戸	戸
宝暦 12 (1762)				35		
享和 4 (1804)				32		
文化 4 (1807)					86	
天保 5 (1834)		58	104	35(33)	72	83
天保 14 (1843)		61	95	37(31)	91	73
嘉永 2 (1849)				38	95	
慶応 2 (1866)					89	
慶応 3 (1867)				43	95	
明治 2 (1869)					108	

( ) 内は小島分

第5表 人口の推移

年代	村	上布田			下石原		
		男	女	計	男	女	計
宝暦 3 (1753)		120	73	193			
宝暦 12 (1762)		89	89	178			
享和 4 (1804)		86	82	168			
文化 4 (1807)					194	215	409
天保 14 (1843)					219	229	448
嘉永 2 (1849)		83	90	173	217	236	453
慶応 2 (1866)					225	247	472
慶応 3 (1867)		115	128	243	228	262	490
明治 2 (1869)					251	286	537

第6表 農業以外の就業

村	年 代	渡 世
上 布 田	享和4 (1804)	酒塩油瀬戸物紙類商1 足袋もも引商1 旅人宿1 蕎麦1 紺屋1 桶工1 髪結1
	文政4 (1821)	酒他商1 蕎麦1 旅人宿1 桶屋1 神職1 不明3
	天保14 (1843)	桶荒物1 醬油塩油類1 質渡世1 煮壳渡世4 旅人宿1 建具屋1 木挽1 不明2
	慶応3 (1867)	食壳旅籠3 煮壳1 居酒屋1 不明2
下 石 原	文化4 (1807)	質之外小商1 酒豆腐3 餅菓子1 紙類多葉粉1 桶工1 大工1 農間水車稼1 不明1
	文政4 (1821)	旅籠屋1 茶商1 餅菓子2 荒物商3 木挽1 大工1 醬油造稼者1
	明治3 (1870)	貸座敷2 質屋2 漁師7 人力車夫1
	明治6 (1873)	遊女貸座敷2 植木1 蕎麦2 魚屋1 菓子2 大工1 髪結1 人力車夫1 不明2

(村差出明細帳, 数目調査による)

外にどんな渡世を営んでいたか、そのあらましを窺うことにする。

資料的には様々な記載から集めてあるので、書く人によってことなったり規準もあいまいである。ことに天保のころがふえ、それ以後増加していると考えられるのにふえていないのは記載もれであろう。農業以外の渡世ということとはまったく農業からはなれないわば専門的におこなっているものもいれば、農間渡世としておこなっているものも含まれているわけである。第6表では時代の古い記載のものが農間渡世<sup>④</sup>が多く、時代のあとのものが専業がふえていたと推察される。これらの渡世を全戸数の中に占める割合でみると、上布田村享和四年二一%、天保一四年三二%、下石原村文化四年一一%となっており、こころみに東海道の宿と比較してみると、寛政末期から文化の初めの保土ヶ谷宿<sup>⑤</sup>が三二%、天保一四年の品川宿<sup>⑥</sup>が三七%となっており、これより

小さくなっている。いわば農村的色彩のこい宿場であったのである。しかし文政の頃より幕末にかけて農業以外の渡世がふえる傾向にあつたと推察され、旅人相手の宿場町的要素が増大していったことと考えられる。従つて宿場による人口支持力も大きくなつたとみられる。なお付加すべきことは慶応三年の食売旅籠と明治初年の遊女貸座敷という記載である。これは慶応元年（一八六五）幕府が布田五ヶ宿に長州征伐の費用として五千両の献金をするように申付けたのを機会に、支払い能力がないからとして食売旅籠設置を願ひでて許可され、食売屋三〇軒、食売女一〇〇人を置くことになつた。天保年間ごろから女子人口の方が多かつた当宿ではかくれた食売女も当然存在したと思われるが、前述のような事情から正式に認めてもらう形式をとり、これ以後公然と食売女をおくようになったと思われる。これらの食売女は他地域から流れこんでくるもので、女子人口の増加にはこのような背景があつた。このように食売旅籠の認可をきっかけとして布田五ヶ宿が近隣の歓楽地的消費経済の小センターとしての意味をもつようになってきたと考えられる。

### 三、農村としての側面

先に農村的色彩のこい宿場であつたことを指摘したが、まず一戸当りの石高によつてそれを窺つてみたい。天保一四年の資料によると左記のとおりである。

国領八石四斗、下布田六石九斗、上布田三石九斗、下石原四石八斗、上石原八石二斗

これによると、主にとりあげた上布田と下石原は布田五ヶ宿の中で相対的に農業に依存してない宿村であるといえる。そこで同じ天保一四年の東海道の農業依存度の比較的大きいとみられる宿場<sup>⑥</sup>とくらべてみると、川崎二・二

第7表 布田五ヶ宿の石高変化

村		年	正保 (1644—7)	天保5 (1834)	天保14 (1843)
国 下 上 下 上	布 布 石 石	領	396石	513石	513石
		田	797	856	662?
		田	232	261	268
		原	260	641	641
		原	275	635	600

出典：武蔵正保田園簿，天保5年武蔵郡郷石高帳，天保14年甲州道中宿村大概帳

注：天保14年の資料は多少あいまいなので現地資料で補正した。

石、神奈川一・八石、保土ヶ谷二・八石といずれも布田五ヶ宿より小さく、布田五ヶ宿の農業依存度が大きいことがわかる。

耕地面積の増加が農村の発達に結びつくには増反による増収であるので、その総合的増収の結果を検討するため石高の増加状況を見ることにした(第7表)。正保から天保にかけていずれも増加し、耕地の面積もふえていったものとみられる。これは近世前期から中期にかけてと考えられ、畑が主であった。従って正保ころは水田村であったものが畑作主体の村と移行した。後期はふえないで停滞するか、むしろ減少している村もみられる。このことは栽培作物の変化とか農業以外の職業に依存していくようになったものと思われる。また資料は省略するが、地目別耕地面積では上田、上畑の比率は小さい。農作物は第8表に示したとおりである。これによれば米の外は、雑穀が主であることがわかる。しかし蔬菜も生産している。明治初年の資料をみるとかなりの量の蔬菜を生産していたようで、おそらくこれは幕末からであったろうと推測される。また特産物として瓜<sup>①</sup>の生産もおこなわれていた。瓜も含めてこれらの蔬菜は国領の隣村金子村のところにも記載されているように、商品として販売されていたと考えられる。販売先はおそらく江戸町方と宿場であろう。江戸表へ販売されていたものにはこのほかに薪があつたが、これらが農家の現金収入源となっていたものと考えられ、布田五ヶ



第8表 農 作 物

下 石 原 村	上 布 田 村
文化 4 (1807) 大麦 小麦 粟 稗 大根 茄子 芋	享和 4 (1804) 大麦 小麦 粟 稗 大根 豆 荳 蕎麦 瓜之類作り申候
文政 4 (1821) 大麦 小麦 粟 稗 荳 大豆 小豆 蕎麦 胡麻 刈豆 瓜之類作り申候当村産物 粟 柿之類	天保14 (1843) 大麦 小麦 桑 刈豆 荳 胡麻 前栽物茄子 瓜之類少々作り申候
嘉永 2 (1849) 大麦 小麦 粟 稗 大豆 小豆 蕎麦 胡麻 刈豆	嘉永 2 (1849) 大麦 小麦 粟 稗 大豆 小豆 荳 蕎麦 ごま 刈豆
明治 6 (1873) 大麦102石 小麦118石 稗 250石 胡麻 2石 菜種 4石 薩 摩芋 150 <sub>駄</sub> 小豆 8石 粟 85石 黍 37石 蕎麦 50石 桑 285 <sub>駄</sub> 里芋 58 駄 柿 15駄 生糸 6貫目	明治 3 (1870) 水稲55石 早稲25石 大麦 300石 小麦 40石 蕎麦 35石 粟 45石 稗 120石 黍 20石 大豆 60 石 小豆 6石 菜種 6石 胡麻 13石 荳 13石 蔬菜、青芋 500 荷 藪 50駄 大根 100駄 茄子 100 荷 南瓜 30 荷 桑 100 駄 製茶 50貫目 梨子 10籠
金 子 村	
嘉永 3 (1850) 稗 粟 大麦 小麦 荳 蕎麦 芋 大根 前栽物は野菜 之外何方へ出商いの儀□□無御座候	

(村明細帳, 物産書上, 数目調書による)

宿の村々が近郊農村的要素<sup>⑥</sup>をもつにいたったことを物語るものである。

これらの農作物の生産には肥料の投入は不可欠であり、水田には下肥、干鰯、油粕、ふすま、酒かすの類、畑は下肥、干鰯、馬糞、灰糠の類でこのほか、芝草、木の葉などを使用した。これらの肥料のうち下肥と干鰯は江戸からの購入肥料であった。とくに下肥は布田五ヶ宿を含む江戸西方十数カ村で、購入について寛政、天保に儀定しており、さらに慶応三年（一八六七）に諸物価値上りになり下肥など肥料まで値上りして困窮しているという記録がある。このことは購入肥料に依存する度合が大きかったことがわかり貨幣経済が浸透していたことが窺える。

農民の階層構成はどのようであったろうか。階層構成の変化を示す資料で布田五ヶ宿

第9表 階 層 構 成

石高	村 年	金 子 村*		上 布 田	下 石 原
		天保 8 (1837)	安政 6 (1859)	慶応 3 (1867)	慶応 3 (1867)
無 高		0戸	0戸	6戸	9戸
0.9 >		10	24	5	7
1.0 <		15	16	4	22
2.0 <		7	10	5	9
3.0 <		7	7	7	14
4.0 <		9	4	1	10
5.0 <		11	5	6	3
6.0 <		8	5	2	4
7.0 <		5	4	0	1
8.0 <		4	2	0	2
9.0 <		3	1	2	5
10.0 <		7	8	4	7
15.0 <		0	1	0	2
20.0 <		1	2	0	2
30.0 <		0	0	0	2
50.0 <		0	0	1	0

\* 国領村の隣

のものが得られなかったので、国領村の隣村金子村のものを示し、上布田と下石原の資料は慶応三年（一八六七）のみを示した（第9表）。金子村の変化をみると天保八年ごろ五、八石の層がかなり存在したのに安政六年になると減少している。安政六年には三石以下の下層農が増加しているし10石以上の層も増加している。すなわち幕末になるに従い、下層と上層が増加し、中間の農民層が減少したことがわかる。

さて上布田と下石原であるが、これは幕末期であり、金子村の変化から推測して下層農と上層農が増加している状況を示すものと考えられる。それほど大きくはないが、このように両極分解の傾向があったことは否めまい。これは貨幣経済の浸透とあいまってこのように変ったものと考えられる。

次に渡世はどのような階層であったか、その

第10表 上 布 田 村  
渡世と石高との関係（慶応3）

渡 世		石 高	
百姓、旅籠屋渡世		3石2斗2升5合	
" " " "		2 5 1 3	
煮旅居不	売籠屋酒	無	高
	" " " "	" " " "	" " " "
	" " " "	" " " "	" " " "

四、ま と め

一般に近世において五街道に宿場町が発達したといわれるが、布田五ヶ宿のような場合は疑問をもつ。もちろん東海道とか中山道などにはやくから交通量の多いところではそのようにいわれることは当然であろうが、甲州道中のように大名交通も少なく、さらに本陣、脇本陣もない農村の要素が大部分をしめる宿では宿場町というより宿駅村とした方がふさわしいのではないか。

しかし近世中期以後増加した民間の交通に依存して発達し、末期になって他の街道にみられるような宿場町の要

関係を第10表から窺ってみたい。

これは上布田村一村のみの例で布田五ヶ宿すべてをみるのは危険であるが、一つの姿は把握しえるのではないだろうか。これによれば農業以外の渡世の者は無高のものが多くことを示している。農間渡世の場合の石高も大きくはない。このように下層農や無高のものは宿場としてのあり方に生活の道を求めていたのであり、末期には両極分解で増加した下層農が町的要素を大きくし、宿場に依存するようになっていったものと考えられる。しかし宿場といってもそれほど大きくないから、依存するには限度があり、農業にも宿場にも依存できない生活困窮者がかなり存在<sup>②</sup>した。

素がふえ、東海道や中山道の宿場町におくられて宿場町として成立したということができるとであろう。以上のことは筆者が、もともと農村であったところに街道ができ宿駅としての機能をはたすようになるかと村であったものがどのよう  
に町に変貌していったかということをとらあげたにすぎない。それは大都市であった江戸町方の発展ということがこの農村を町的なすがたへ変えていった要因であったことは否定できないし、また江戸という大きな都市との関係の中で、小さな一つの中心としての意味もあわせもっていたことも指摘できるのである。

末文ながら御指導をいただいた小栗宏博士に感謝するとともに、所蔵文書を拝見させていただいた熊沢富雄氏、原育夫氏、金子君代氏、小林常太郎氏に厚く御礼を申しあげたい。

注

- ① 府中市史料集(4) 府中市史編纂委員会
  - ② 農間副業として両村の村明細帳には男は薪を伐出し江戸表へ販売し、かえりに下肥をととのえ、また女は江戸から購入してきた綿を織出す仕事に従事していたことが記載されている。
  - ③ 浅香幸雄 明細帳より見た川崎、神奈川、保土ヶ谷宿 地評二二巻一号
  - ④ 吉川博康他三名 近世末期における品川宿の地域的考察 学芸地理第九号
  - ⑤ 宗門人別帳をみると判明する。
  - ⑥ 前掲③
  - ⑦ 新編武蔵風土記稿 第五巻 ならびに府中市史料集(4)を参照。
  - ⑧ 伊藤好一 江戸近郊の蔬菜栽培(日本産業史大系4)によると、三〇キロも離れた村が江戸向野菜の生産地となっている。
  - ⑨ 明治元年の下石原宿に困窮人別書上がある。
- それによると石高別困窮者は下の通りである。

三石以上	一人
一石以上	四三
一石未満	一六
不明	七〇
計	一七〇